

NPO 多摩川エコミュージアム／NPO 21 世紀水倶楽部 主催

## 多摩川の水、これまでとこれから ～水環境と下水道～

NPO 21 世紀水倶楽部（安藤茂理事長）と、多摩川水系・流域の環境活動等に取り組む NPO 多摩川エコミュージアム（北島信夫代表理事）は 10 月 16 日、川崎市多摩区宿河原のニヶ領せせらぎ館において、「多摩川の水、これまでとこれから～水環境と下水道～」をテーマとするシンポジウムを開催した。国土交通省京浜河川事務所、東京都下水道局、川崎市上下水道局が後援し、それぞれの立場から多摩川の水質改善にどう取り組んできたのか、またこれからどうすべきかを述べるとともに、多摩川に関わる市民活動が紹介され、市民と行政それぞれの役割などが議論された。



開会の挨拶を行う清水治 21 世紀水倶楽部副理事長

シンポジウムは事例発表と総合討論の二部構成で行われ、第一部、事例発表のトップパネラーは、「多摩川と下水道～これまでとこれから～」と題して発表した、東京都下水道局流域下水道本部技術部計画課長の中坪雄二氏。

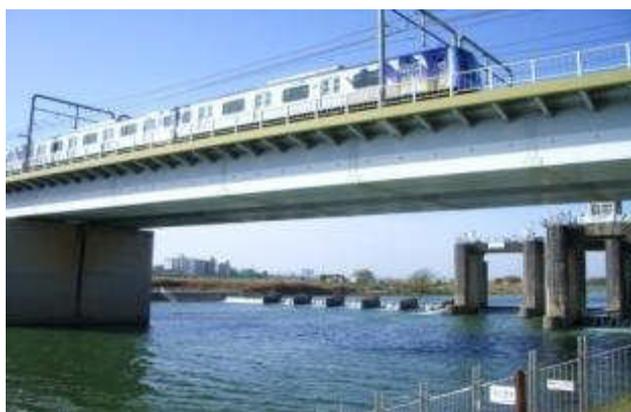


東京都下水道局流域下水道本部技術部技術部の中坪雄二計画課長

中坪氏は、多摩川中流域では河川水量の半分から2/3が下水処理水であり、昭和40年代に生活雑排水等で汚濁が進んでいた多摩川が下水道の普及に伴って改善されてきたものの、現在は高度処理（平成27年度までに高度処理割合60%が目標）や合流改善、地球温暖化対策、水再生センターからの放流水温の変化といった課題に取り組んでいることを報告した。



昭和40年代半ばの多摩川（田園都市線）



現在の多摩川



次に、NPO 多摩川エコミュージアム副代表理事で、子どもたちの学び・遊び場として川という自然の教育力を活用した「かわさき水辺の楽校」校長の佐々木梅吉氏が、「水辺の楽校からみた多摩川」を紹介した。

かわさき水辺の楽校は、平成 13 年 7 月に開校し、源流体験や清掃活動、外来種の除去、水質検査・パックテスト、いかだ下り、さかなつかみ大会など、子どもたちばかりでなく大人たちも水辺の楽校を楽しんでいることが報告された。「水辺の学校は不滅です！」という締め括りはとても印象的だった。



かわさき水辺の楽校の佐々木梅吉校長

続いて同じく NPO 多摩川エコミュージアム副代表理事の松井隆一氏が、川崎市内を東西に流れる平瀬川の流域まちづくり協議会事務局長を務めている経験を活かして「街づくりと水環境」について発表した。



平瀬川流域まちづくり協議会の松井隆一事務局長

この取り組みは、「わずか 8 km 弱の小さな水辺空間」においても、その活動が楽しみや絆、教育に繋がっていることを示したもの。松井氏はこの事例発表とともに、潤いのある街づ

くりを目指した環境水路網事業と雨水浸透策事業など水の活用を考えた施策の提案を行った。

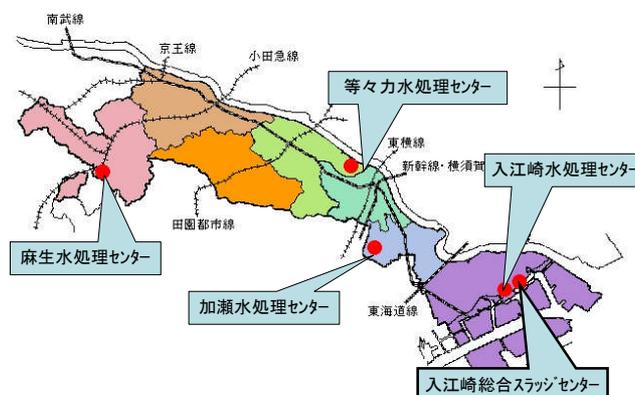


平瀬川流域活動

この後、川崎市上下水道局下水道部技術開発・雨水貯留管担当課長の伊達知見氏が「川崎市における下水道の取組み～これまで・これから～」について事例発表を行った。



川崎市上下水道局下水道部の伊達知見技術開発・雨水貯留管担当課長



川崎市の水処理センター

この事例発表では、2003年に供用開始し、今では「明るくなる前から散歩する人がいる」ほど市民に親しまれている江川せせらぎ遊歩道をはじめとした下水道のこれまでの取り組みや現状、水質規制の経緯、地球温暖化対策等に向けたこれからの取り組みなどが紹介された。伊達氏は「川がきれいになったことをもっとPRすべき。そのためには市民との交流が大事」と結んだ。

#### 川崎市下水道のこれまで

| 年            | 取組み                  |
|--------------|----------------------|
| 1931 (昭和 6)  | 下水道工事の着手             |
| 1961 (昭和 36) | 川崎市で最初の入江崎下水処理場が稼働   |
| 1973 (昭和 48) | 加瀬下水処理場の運転開始         |
| 1982 (昭和 57) | 等々力環境センターの運転開始       |
| 1989 (平成 元)  | 麻生環境センターの運転開始        |
| 1995 (平成 7)  | 入江崎総合スラッジセンターの運転開始   |
| 2002 (平成 14) | 入江崎水処理センターの高度処理の運転開始 |
| 2002 (平成 15) | 等々力水処理センターの高度処理の運転開始 |
| 2003 (平成 15) | 江川せせらぎ遊歩道の供用開始       |

最後に、国土交通省京浜河川事務所河川環境課長の国頭正信氏が「多摩川の水環境～新たな水質改善への取り組み～」と題し、同事務所の長年の水質データ等をもとに、水質汚濁が著しかった昭和 40 年代と現代を比較してみせた。



国土交通省京浜河川事務所の国頭正信河川環境課長

この中では、今年のアユの遡上が調査開始以来最大の 196 万尾となったことで、多くの新聞記者の取材を受け、その要因のひとつとして、下水道普及率による水質の改善が報告された。また、なじみ放流など新たな水質改善の取り組みも紹介された。



1970年（昭和45年）多摩川の泡（東京都環境局提供）



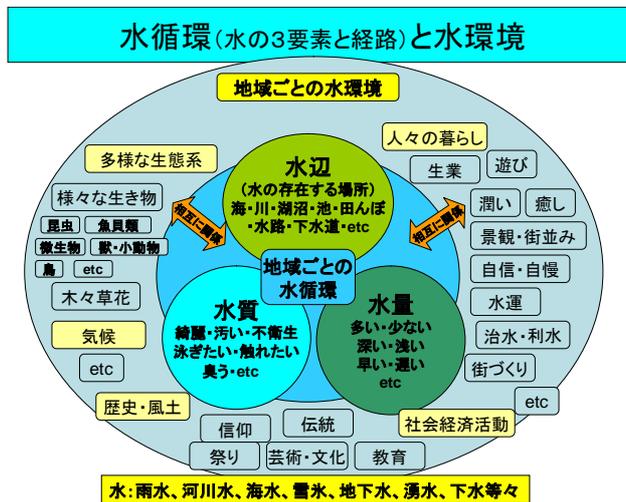
調査開始以来最大のアユ遡上が推定された調布取水堰

これらの事例発表を踏まえて第二部では、21世紀水倶楽部理事の栗原秀人氏がコーディネーターとなり、事例発表を行った5名も参加し、さらに会場に訪れた市民や自治体関係者など約50名も交えて総合討論を行った。

栗原氏は、議論の前提として水循環と水環境を図説したうえで、①多摩川にとって望ましい水環境とは、②行政（河川管理者、地方公共団体）と市民、NPO等の役割と連携のあり方、③今日まで水質改善に果たしてきた下水道等の取り組みの効果と課題、今後行うべき取り組みとは、の3つの論点を挙げて討論を進めた。



活発な議論が繰り広げられた総合討論



会場からの質問も相次いだ

会場からの質問も相次ぎ、雨水整備率や合流改善率、高度処理率などの言葉の定義をはじめ、高度処理費用や環境ホルモンなどの分野にも及び、下水の水温上昇対策、市民の多摩川に対する要望など活発な議論が繰り広げられた。

総合討論の締め括りとして、多摩川に対する将来の夢を会場から募ったが、「一人ひとりが身近な問題として、多摩川の水をきれいにするためのやり方を考えていかなければならない」（主婦）、「多摩川はアユの穴場だと思っているが、それに使われたものをもっと清掃していきたい」（釣人）などの声が聞かれた。